平成29年度　校内研修報告書

学校名　藤岡市立小野中学校
住　所　藤岡市立石４０７番地
校長名　長谷川　弘幸

Ⅰ　研修主題

学びをもとに、主体的に判断・表現できる生徒の育成
－ねらいにせまる協働的な学びを通して－

Ⅱ　研究の概要

１　主題設定の理由

小野小・中学校は、平成２６年度より藤岡市教育委員会、西部教育事務所、群馬県教育委員会の指定を受け、「夢に向かってかがやく子」を目指す児童生徒像、「９年間の学びを大切にする学校」を目指す学校像に掲げ、小中一貫教委浮くの実践・研究に取り組んできた

昨年度は指定３年目の集大成という位置付けのもと、「学びをもとに協働しながら、高め合い、目的を達成しようとする生徒の育成－９年間のつながりを生かす授業スタンダードを意識した授業改善を通して－」という研究主題を設定し、各教科における目指す児童生徒像をより具体的にしたうえで授業実践を行った。主な取組としては小野小・中学校それぞれで授業を公開し、市内の小・中学校教員も交えながら授業検討をすることで、研究主題にせまるための授業改善を図った。また、各教科の実践を「９年間のつながりを生かす授業づくりアイデア集」にまとめ、市内の小・中学校に実践で得た成果を発信することができた。

課題として、教員はどのようなねらいのもとに協働的な学びを設定し、どのような形態（拡散型・収束型・分類型・組立型など）を使い分けていくのかについて、生徒は友人と話し合うなどの協働的な学びを通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができたという意識がやや低いという課題が見られ、教員、生徒ともに授業スタンダードのステップ２に関わる「協働的な学び」の質を高めることが明らかになった。また、次期学習指導要領の改定のポイントでも、「主体的・対話的で深い学び」という協働的な学びに関わる学習の充実が求められていた。

そこで、本年度は昨年度までの取組・実践を元に、小・中学校共通の課題の「表現力」をキーワードに、「ねらいにせまる協働的な学び」の質を高めることを目指した授業改善を図ることで、「学びをもとに、主体的に判断・表現できる生徒」を育てたいと考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

９年間のつながりを意識した「系統一覧表」や「指導の系統」、「つなぎ教材」を活用をしつつ、「授業のスタンダード」のステップ２の充実を意識した授業、協働的な学びの質を高める授業改善を行うことで、これまでの「学びをもとに、主体的に判断・表現できる生徒」を育てることができることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究の内容と方法

（１）研究内容

○９年間のつながりを生かした授業づくり

・教科ごとに作成した系統一覧等を活用し、その授業が、小学校も含むこれまでのどの単元とつながっているか、また、これから先のどの単元と、どのようにつながっているかを意識して授業づくりをする。

○授業のスタンダードを意識した授業展開

・各教科の特性を考慮した、「授業スタンダード」の日常的な実践を進めるとともに、特にステップ２の「課題をじっくり」を充実させる授業の実践を重点として取り組む。

◎協働的な学びの質を高める授業展開

・それぞれの教科の特性を生かした、手立ての焦点化と実践

（協働的な学び：場の設定、課題･発問の工夫、支援の工夫、評価の工夫…等）

（2）研究方法

○教科部会を中心に研究を進め、教材研究や授業実践を行う。

○小学校の担当教諭との意見交流を進め、９年間のつながり、協働的な学びの質を高めることを意識して、研究を深めていく。

○小・中学校それぞれで授業公開を行い、合同で授業検討をすることで、更なる授業改善を図っていく。

○アンケートを実施し、客観的な数値から得た成果と課題を次回以降の取組に活かす。

○「研修のまとめ」（実践の報告書）を作成することで、実践内容の進化・共有化を図る。

４　研究の経過

4/ 5　本校の取組についての共通理解、教科部会における指導の重点の確認　等

4/24　昨年度までの実践と今後に向けて

5/22　小野小中合同研修①

・目指す授業像の共通理解　　・教科部会→今年度の授業構想

6/ 5　小野小中合同研修②　授業スタンダードの共通理解　モデル授業実施

・１年　数学「正負の数」清水克也教諭　　美術「鳥獣花木図屏風」中村順子教諭

社会「世界各地の衣食住とその変化」齋藤博幸教諭

・２年　理科「化学変化と原子・分子」櫻井大起教諭

英語「Lesson3　The Ogasawara Islands」山川真美教諭

6/26　小野小中合同研修③　小野小学校モデル授業参観

7/ 4　講話　「小中一貫教育」　関根真理教育研究所所長

1学期末　第１回校内研修に関わるアンケート実施（生徒・教員）

8/21　小野小中合同研修④

・講話「めあてとまとめを明確にした授業づくり」野中友華指導主事

・小中合同教科部会→小野小計画訪問に向けた授業構想シート検討

9/11　第１回校内研修に関わるアンケートの結果分析（成果と課題の把握　計画訪問に向けて）

10/ 5　小野小計画訪問　教科部会ごとに授業参観

10/ 6　小野小中合同研修⑤

・小中合同教科部会→小野中計画訪問に向けた授業構想シート検討

11/ 2　小野中計画訪問　教科部会ごとに授業参観

11/20　小野小中合同研修⑥

講話　「コミュニティ・スクールについて」　田中政文教育長

1/22　教科部会→・「年間指導計画」、「系統一覧表」、「指導の系統」の朱入れ

2/ 5　小野小中合同研修⑦

１年のまとめ　教科部会　指導の振り返り　次年度の課題検討

2月中旬　第２回校内研修に関わるアンケート実施（生徒・教員）

2/19　ＣＲＴ分析　次年度の授業づくり検討

3/ 5　第２回校内研修に関わるアンケートの結果分析（成果と課題の把握　来年度に向けて）

3月末　「研修のまとめ」（実践の報告書）の配布

５　主な実践

○「ねらいにせまる協働的な学び」を意識した授業づくり（実践例）

・平成２９年１１月２日（木曜日）　数学　指導者　　清水みなみ教諭

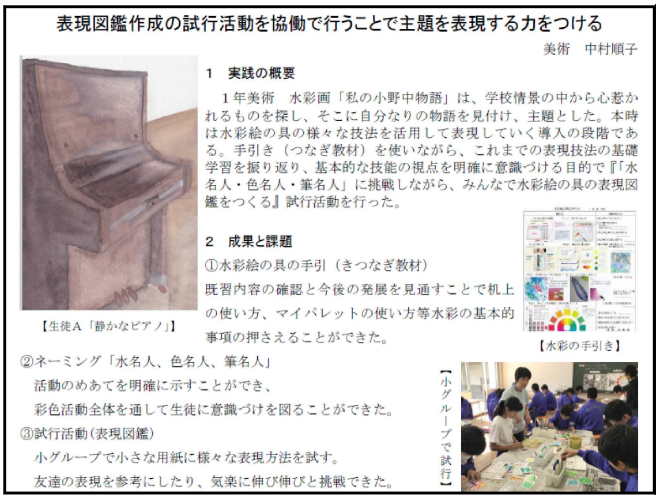
単元名　　「相似な図形」

接的には測定できない校舎の高さを求める場面で、実際には存在しない相似な三角形を見出し、高さを求める方法を具体的に考える活動を行った。相似な２つの三角形をつくるために、いくつかの道具をどのように利用すればよいかの話し合い活動を通して、校舎の高さを実際に求めてみるというねらいを達成できるようにした。

・平成２９年１１月２日（木曜日）　美術　指導者　中村順子教諭

題材名　　水彩画「私の小野中物語」

水彩の手引き（つなぎ教材）を使いながら、これまでの表現技法の基礎学習を振り返り、基本的な技能の視点を明確に意識づける目的で『「水名人・色名人・筆名人」に挑戦しながら、みんなで水彩絵の具の表現図鑑をつくる』試行活動を行った。協働により「友達のよさを認め、自分の作品に取り入れる。自分の主題を表現する方法を模索する。」等作品の質に大きな変化が見られた。



表現図鑑作成の試行活動を協働で行うことで主題を表現する力をつける

美術　中村順子

【生徒A「静かなピアノ」】

1　実践の概要

1年美術　水彩画「私の小野中物語」は、学校情景の中から心惹かれるものを探し、そこに自分なりの物語を見付け、主題とした。本時は水彩絵の具の様々な技法を活用して表現していく導入の段階である。手引き（つなぎ教材）を使いながら、これまでの表現技法の基礎学習を振り返り、基本的な技能の視点を明確に意識づける目的で『「水名人・色名人・筆名人」に挑戦しながら、みんなで水彩絵の具の表現図鑑をつくる』試行活動を行った。

2　成果と課題

①水彩絵の具の手引（きつなぎ教材）

既習内容の確認と今後の発展を見通すことで机上の使い方、マイパレットの使い方等水彩の基本的事項の押さえることができた。

【水彩の手引き】

②ネーミング「水名人、色名人、筆名人」

活動のめあてを明確に示すことができ、

彩色活動全体を通して生徒に意識づけを図ることができた。

③試行活動（表現図鑑）

小グループで小さな用紙に様々な表現方法を試す。

友達の表現を参考にしたり、気楽に伸び伸びと挑戦できた。

【小グループで試行】

○「研修のまとめ」（報告書）の作成

ねらいにせまる協働的な学びを通し、研修主題に掲げる生徒を育てるために実践した授業の概要や、成果と課題をまとめた報告書を作成した。

授業スタンダードのステップ２に関わる「協働的な学び」の質を高める授業について、教員の意識の向上を図ることができた。

また、実践内容を共有し、優れた手立てについて理解を深めることができた。

Ⅲ　研究実践の成果と課題

○全教員が、授業スタンダードのステップ２に関わる「協働的な学び」の質を高めることを意識した授業実践を日常的に行うことで、話し合い活動を積極的に取り入れたり、質を高めていこうとする教員の意識に大きな向上が見られた。

○小中学校の教員が話し合い、「学びのつながりを意識した授業」や「協働的な学びを取り入れた授業」をつくることで、教員の教材研究が深まった。また、モデル授業を行い授業検討を繰り返すことで、昨年度まで取り組んできた授業づくりについても理解を深めることができた。

○「研修のまとめ」（報告書）を作成し、実践のまとめや共有化を図ることができた。

●今後は、生徒のより主体的で対話的な協働学習を目指すとともに、各教科の特性に応じた「めあて」を考えていくことで、さらに質の高い協働学習の在り方を追究していく。

●モデル授業などを通し、「９年間の学びのつながりを意識した授業」や「授業スタンダード」を継承していく。

Ⅳ　CRT学力テストの結果分析及び次年度の学力向上対策の方向性

1年	成果	課題	来年度の授業づくりに向けて
国語	△「書くこと」では、1単元につき1回意見文を書く活動を取り入れてきた結果、作文に関する4問において全国平均を1.3～3ポイント上回った。段落構成の数、意見の明確さなど、留意すべきことが意識化されつつある様子が見受けられた。	▲「漢字の読み書き」、「ことわざ」に関する設問は、9問中6問が全国平均を1.8～10.9ポイント下回り、そのうち3問は目標値に達しなかった。小学校で学習した漢字の未習得や忘れ、ことわざに関する知識が不十分であることがわかる。	・毎時間3～5分間を**「語彙力向上タイム」**と設定する。ドリル形式で既習の漢字を確認する活動や資料集でことわざや慣用句を読んだり使ったりする活動を通して、様々な言葉に触れる機会を意識的に与える。**朝読書**が語彙力の向上につながるようする。
数学	△全国の正答率と比較し、「基礎」で5.4ポイント、「活用」で7.5ポイント上回った。特に「平面図形」は11.2ポイント、「1次方程式」は10.4ポイント上回っており、冬休みの課題を自作し基本的な内容の重視して復習したことや、年計を工夫しテスト前に的復習したことで内容の定着を図ることができた。	▼文字式で条件を示した正負の数の値がどのような数値を取るかを答える問題は、全国比で－12.4ポイント、反比例の関係にあるx,yの関係を式に表す問題は、全国比で－6.6ポイントであり、整数論のようにや比例よりも具体的なイメージが持ちにくい反比例及び文字式の理解が不十分であると考える。	・本学年生徒の実態を、授業の見取りやCRTの結果から考えると、内容の理解や定着おいて、**具体物と言葉、文字式、表などを密接に関連**させて指導する必要がある。
理科	△実験の考察及びまとめをする際に、生徒が自分の言葉で行う機会を多く取り入れることを継続的に行った結果、科学的な思考・表現および記述解答について、全国平均を上回ることができた。	▼光の反射は0.5ポイント上回ったが、光の屈折は6.1ポイント下回り、全反射利用の例は15.7ポイント下回った。実験は演示実験と生徒実験をし、身近な例も答えさせて確認したが、修正し、まとめをしたものの定着に至らなかったと考えられる。	・考察では、まず**自分の考えをまとめてから、交流をさせていくことを継続**し、自分の考えをまとめる際に、根拠となる既習事項や生活体験を想起させる工夫をさらに向上させていく。
社会	△全国平均と比較し、教科全体では３．７ポイント、「基礎」は５．４ポイント上回り、「活用」は１１．４ポイント上回った。 △観点別でも思考・判断・表現力が１０．３ポイント上回り、授業の中で自分の考えを表現させる活動や授業内容をまとめることを実施してきた成果の表れと言える。	▼観点別に分析するとどれも全国平均正答率を上回っているが、知識・理解はわずか３．０ポイントしか上回っていない。 ▼領域別で見ると歴史分野の「古代までの日本」が低めである。	・「基礎」や「知識・理解」が低いことをふまえ、**毎時間一問一答形式での問題**に取り組ませ、基礎知識の定着を図る。 ・授業のさいご・まとめに、今回の授業の内容をふりかえる時間を設け、授業内容を整理することで、「観点：知識・理解」の向上を図る。
英語	△校内スペリングコンテストや冬休み後に英単語テストを実施するなど、語彙力の強化を継続的に行った結果、「語彙の知識・理解」が全国平均を10.1ポイント上回った。	▼「語形・語法の知識・理解」は全国平均を3.7ポイント下回り、文のしくみの定着が不十分であることが考えられる。	・**基本的な疑問文を用いた会話練習**は継続させながら、まとまった量の文を書く機会を増やし、自己表現力をさらに高めさせる。
まとめ	・各教科ともに基礎的な内容で一問一答式で簡単に答えられる問題についてはよくできていた。授業及び冬休みの課題等での復習が成果と修めた。	・各教科とも内容がやや難しい問題や単元で正答率が下がっている。文章をしっかり理解したり、自分の言葉で要約したりする力が十分ではない。また、個々の問題は分かるが、内容の全体像がつかめていないことがが授業と併せて考察すると推測される。	・正答率の落ち込んでいる単元や小問を復習の中で意図的に力を入れて扱うことと理解できない生徒への理解をさせる手立てについて、工夫していく必要がある。

2年	成果	課題	来年度の授業づくりに向けて
国語	・「話すこと・聞くこと」の領域では、記述式の「話し合いの方向性をとらえたうえで、自分の意見をまとめる」問題で大きく目標値、全国平均を上回ることができた。授業内で「話す」活動をする際、評価の基準を明確にし、自分の考えを発表する活動を行った成果であると考えられる。	・「書くこと」の領域において、領域全体の正答率は目標値、全国平均を上回り、「3段落構成で書く」「伝えたいことを明確にして書く」など構成、内容は条件に通りに書くことができた生徒が多かった、しかし、「指定された文字数で書く」という課題で全国正答率を下回った。無答率が6.1％と高かた。	・めあてや評価基準を明確にし、授業中に身に付けたい力を明確にし、授業を行ってきた。「話すこと」や「書く力」を的確に伸ばすだけでなく、力の着いたことが実感しにくい**「読むこと」においても生徒が実感しやすいよう、めあてを提示**して授業を行っていきたい。
数学	△全国の正答率と比較し、「基礎」で6.7ポイント、「活用」で10.4ポイント「教科全体」では7.4ポイント上回った。特に「証明」は10.8ポイント、「図形の性質」は10.3ポイント上回っており、授業前にフラッシュカードで図形に関する基本事項や合同条件の確認を継続して取り組んだ成果が現れた。	・分数を含む単項式どうしの除法を答える問題では、前年度比は－5.9ポイント、全国平均では－1.2ポイントであり、分数のわり算はかけ算に直し、分母と分子を入れ替えることの基礎的な部分の定着が不十分であると考える。計算処理能力に課題がある。	・問題に触れている量が少ないことから、**定期的に計算の課題を出す**ことで、早く正確に計算できる能力を身に付けさせることが必要である。
理科	・めあてに対するまとめや、考察の場面で、自分の言葉で記述することを継続的に行った結果、「科学的な思考・表現」が全国平均正答率と比較し、8.1ポイント上回った。	・化学式の定着が不十分であった。また環境問題との関連付けができなかった生徒がおり、「エネルギー領域」が全国平均正答率と比較し、6.6ポイント上回るだけとなってしまった。また類型外誤答と無回答を合わせた割合が35％と多くなってしまった。	・**自分の言葉で記述する場面を意図的に設定**し、継続することにより、科学的な思考・表現の向上を図る。
社会	・授業の中での話し合い活動や、自分の言葉でまとめる活動を継続的に行った結果、「社会的な思考・判断・表現」が全国平均を７．８ポイント、解答形式の「記述」が全国比を１７．６ポイント上回った。	・「地理」で、貿易に関する複数の資料について考察したことを読み取る問題は前年度比－６．４ポイントであり、日常の授業から複数の資料を比較、検討する様な学習を積極的に取り入れる必要があると考える。	・**話し合い活動や自分の言葉でまとめる学習活動**を継続的に行い、社会的な思考・判断・表現力の向上を図る。
英語	・ALTとJTEのモデル文を聞かせて内容を類推したりする活動を行い、どんな話しをしているかを注意深く聞かせたことで、リスニングにおいて、「内容理解」では目標値よりも10.3pt、「対話文の応答」では目標値よりも8.2pt高く正答していた。	・「語形・語法の知識・理解」では、目標値よりも高く正答していたものの、目標値と比べて1.3pt高いほどであった。また、「長文の読み取り」でも、目標値より高いものの、正答率が59.6ptと、他の項目と比べてやや低い傾向にある。	・**長文読解を日頃の授業から帯活動**として行い、入試問題にも対応できる実践力を養う。教科書の内容を予備知識なしで生徒たちに読解させたり、文章問題に取り組ませる際には、時間を意識させ、発問の意図や求められている答えを生徒と一緒に考えていきたい。
まとめ	・どの教科にも共通して成果が上がった学びの手段は、「自分の言葉でまとめる・発表する」ということであった。このことにより、各教科、思考・判断の力が向上したと考える。	・各教科で多く見られた課題は、「複数の項目を関連させて考える」という総合的に思考・判断する力が弱いということである。また、自分の言葉で表現できても字数制限されるとまとめきれない弱点も明らかになった。	・各教科で共通して言えるのは、「継続」である。身につけたい資質・能力めざして、授業の活動で、家庭学習の課題で、常時、または定期的に、取り組ませていきたいと考える。

平成 29 年度

研　修　の　ま　と　め

学びをもとに　主体的に判断・表現できる生徒

ーねらいにせまる協働的な学びを通してー

藤岡市立小野中学校

【思考ツール】を活用し「協働的な学び」を通してねらいに迫る授業

国語　和田　佑果

１　実践の概要

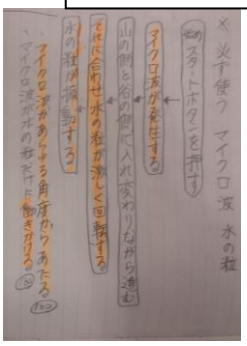
説明文の「問いに対する答え」をまとめる場面において、重要語句を抜き出したり物事の順序を正しく把握したりする際に【思考ツール】を活用して要点を可視化し整理する。この活動は、自分の考えをしっかりと持った上で班での交流に臨み、友達の考えとの差異をはっきりさせ、まとめるためのよりよいキーワードを選出することに有効であると考えた。

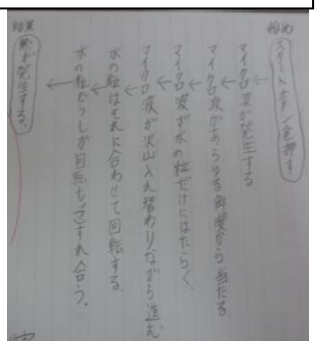
本年度の研究授業では【思考ツール：ステップチャート】を用いた。「何が・どうする」を基本とする、なるべく短い文を時系列の順に矢印でつなぎ、考えを可視化する活動を生徒一人ひとりが行う。次に、班で個人の意見を見せ合いながら、キーワードや時系列、事柄の関係性を話し合い、よりすっきりとしたステップチャートになるよう精選していく。この活動を投入することで、効果的に自分の意見と他者の意見を比べ合い、重要語句や正しい時系列を意識して「問に対する答え」を要約するというねらいに迫っていけると考えた。

２授業実践と成果

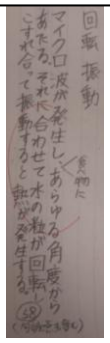
①個人の意見を【ステップチャート】の形式で書く。
②【ステップチャート】を班で共有し、より精選したステップチャートにまとめる。
③【ステップチャート】を元にして、「問に対する答え」を個人で６０字程度の文章にまとめる。

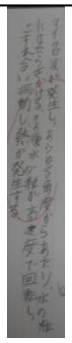
①②【思考ツール：ステップチャート】





③【ステップチャート】を利用した個人のまとめ





・①ステップチャートに事柄を整理することで、物事の関係性や順序を意識しながら自分の意見を書くことができた。
・②同じ形式にまとめることで、互いの意見の差異がはっきりし、話し合いの視点がぶれることなくよりよい班の意見にまとめることができた。
・②主体的に思考・判断し、項目を追加したり削除したりするなど、自分の意見を精選することができた。
・③ステップチャートを通して物事の関係性や順序を把握し、重要語句を抜き出す過程を踏んだことで、電子レンジの加熱の仕組みを正しくまとめることができた。

３課題と今後に向けて

８～９割の生徒が自分の言葉で課題を解決できた。一方、早く課題が解決できた生徒が手持ち無沙汰になってしまったため、複線型の指導ができるような計画をする。

色々な種類の思考ツールを活動に投入し、課題や場面によって使い分けられるようにする。

生徒による例題説明とそれに対する質問や意見交換をもとにした協動的な学び

数学　清水　克也

１　授業構想に対する基本的な考え方

教師になって３０余年、最近の生徒の数学の力が自分のイメージしたように伸びていないことを感じている。生徒からは「先生の授業はわかりやすい。楽しい。」等、生徒のから好評は得ているが、主体的に考えていく数学にたどり着いていない現状を感じている。

そこで、生徒に予習のページ数をおよび例題説明の担当を事前に指示し、生徒自身が自分で説明しなくてはならいという場面と、自分で説明しさらに友人から内容の質問に答え友人から認められる場面を意図的に設定してやることにより、自ら学ぼうとする意欲や自分で考える楽しみなどを感じられると考え、この授業を企画した。

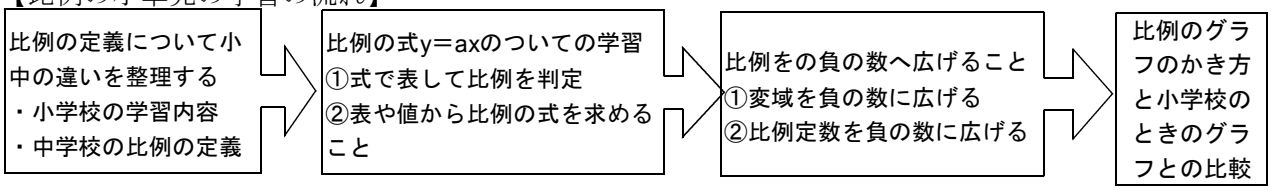
２　実践の概要

(1) １単位時間の流れ

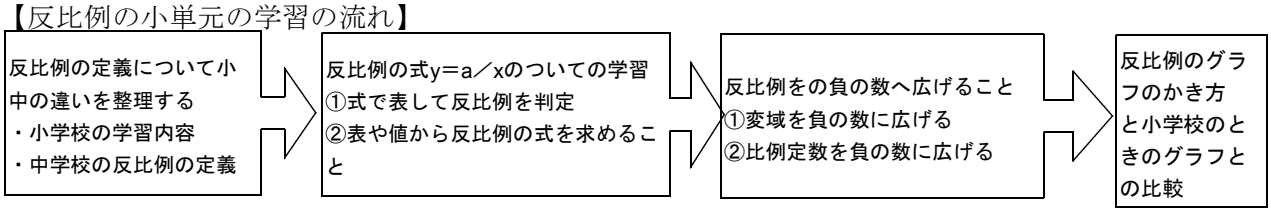
班ごとに指示されている例題を説明する、事前にホワイトボードに説明に必要なことや要点などを書いて準備しておく。班で問題朗読係、説明係、指示係、質問回答係、など役割を自主的に決めて授業に臨む。説明が終わると、生徒から質問や説明の不備の指摘等が行われる。教師が補足して、問の練習に入る。その後、次の例題に移項して繰り返す。最後にまとめを教師中心で行う。

(2) 単元構想例

【比例の小単元の学習の流れ】



【反比例の小単元の学習の流れ】



２つの小単元の流れは酷似しており、生徒が主体になって説明や質問をするときに前単元の流れを参考にしながら進めることができる。また、予習をする場合も、見通しを持って行えるため、質問や意見交換のポイントが予想できるため、生徒の協動的な学習がより充実する。

３　成果と課題

○生徒に予習の習慣がついてきた。

○人前で説明すること、質問すること、間違えた意見でも言うこと、自分なりの考えを言おうとすることなどに抵抗感が少なくなっている。

○知識的な内容及び技能的な内容については、説明授業が定着してきた。

△考え方を主眼とした時間では、意見交流に教師が入る必要が高まる。

△実態として、下位群の生徒が非常に多いため、一斉授業では限界があるので、少人数指導と効果的に組み合わせてながら、単元計画を工夫する必要がある。

相似の考えを利用し、数学的活動を通してねらいに迫る授業

数学　清水みなみ

１　実践の概要

本時の授業では、直接的には測定できない校舎の高さを工夫して求めようとする場面で、相似な図形の考えを利用して高さを求める方法を班での話し合いを通して具体的に考える数学的活動を取り入れることで、生徒は数学を用いて問題解決すること（数学的方法）のよさを感得できるようにしたいと考えた。そこで、いくつかの道具（①棒３本、②教師用コンパスと棒１本、③紙１枚）を利用して、２つの相似な直角三角形を見出す方法を考え、実際に測定・検証をすることで校舎の高さを求めていく。

この活動を通して、日常生活に潜む事象を理想化・単純化して数学の舞台にのせ、数学的な検証を行い、数学の言葉を使って事象を論理的に説明する経験をさせることができると考えた。

２　授業実践と成果

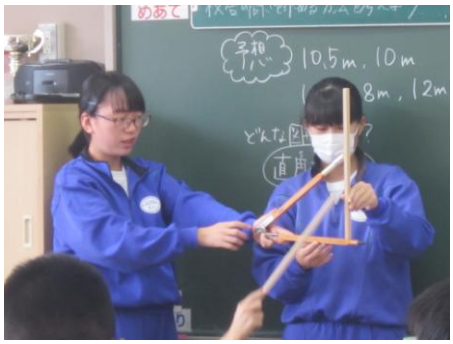
①　校舎の高さを求める方法を、相似を使って求めるために、３種類の道具を提示する。

②　個人解決の後、どこに相似な直角三角形をつくればよいのか、また道具をどのように使えばよいのかを班で話し合う。

③　出てきた考えをもとに、班での考えを発表し、次時の実測につなげる予想をする。

＜写真１：話し合い活動＞

＜写真２：話し合い活動＞



＜写真３：全体での発表＞

・本時の授業では１時間を通して、生徒がよく考え、意見を出し合うことができた。＜写真１＞や＜写真２＞のように教師用コンパスと棒をどのように使って直角三角形をつくればよいのかを、試行錯誤しながら班で話し合う様子がみられた。

・「これまでの学び」「ここでの学び」を意識して単元の授業を構成してきたため、算数科での拡大・縮図との違いを意識し、二つの直角三角形（相似な図形）をつくることで解決するという考えで解決していく様子がみられた。

３　課題と今後にむけて

本時の授業では、教師側が測定に使う道具を指定したために、生徒たち自身が道具の必要性を感じていなかったように感じた。そのため、生徒にどのような道具を使ったらよいかを投げかけてみるという授業展開も考えられる。また本時では、教室内で「相似な図形がどこにできるのか」、「どのように指定された道具を使うのか」ということを考えた後に測定をする、という授業展開であったが、外で道具を使いながら考える、という授業展開も考えられる。直接的には測定できないものの高さや長さを求める授業では様々な授業展開が考えられるため、生徒の実態や学習の進度と比べながら授業展開を工夫したり、変えたりしていく必要がある。

三角形の作図を利用し、数学的活動を通してねらいに迫る授業

数学　牧繪光輝

１　実践の概要

本時の授業では、三角形の合同条件を定義する場面で、「２辺と１角」、「１辺と２角」の条件だけでは、なぜ１通りに決まらないのか、ただ１つに図形が決まる時はどのような時かを考えさせ、班での意見交換や、共有し考える数学的活動を行った。

実際に、ある三角形を黒板に提示し作図を利用して、「3 辺・3 角」の要素のどれが分かっていれば合同な図形がかけるかを考え、班で話し合い、三角形の合同条件を導き出していく。

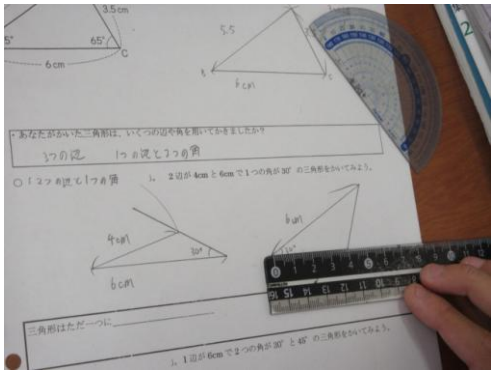
この活動を通して、小学校の内容を利用して考える大切さや、合同な三角形を示すためには、より厳密な言葉で定義する必要があることが理解できると考えた。

２　授業実践と成果

①　三角形をかくためには、最低でどの要素（辺や角）が必要だったか、実際に図形をかかせて考えさせる。

②　3 つの条件に（3 辺、1 組の辺と 2 つの角、2 組の辺と 1 つの角）ついて、辺の位置や角の位置などがどこに決まれば、ただ一つに決まるかを個人で考え、班で共有する。

③　辺や角の等しい位置に印をつけ、三角形の合同条件としてまとめる。



・どの生徒も意欲的に活動することができた。

・本時の授業では１時間を通して、どのように定義すれば、合同な三角形がつくれるのかを、個人で試行錯誤しながら、班で共有し合う様子がみられた。

・「これまでの学び」を意識できるよう授業を構成したため、生徒は算数科での三角形の作図を意識し、解決していく様子がみられた。

3　課題と今後にむけて

本時の授業では、先に三角形を黒板に掲示し、生徒に黒板と同様な図をかくような活動を行ったが、図形を提示せず、辺の長さと角の大きさのみを提示した方が、生徒は三角形がただ一つに決まる条件を見出す意義を理解できると感じた。

合同な図形の作図は小学 5 年次で学習しており、スムーズに図形をかくことができたが、かいた図形を班の人のみの共有で終わってしまい、どのように作図したのかを全体で共有することができなかった。

また、小学校と中学校との違いが明確にできておらず、「小学校のときにもやったのに、なぜもう一回やるのか？」と納得がいっていない生徒が何人か見受けられた。

今後は、指導内容をさらに明確にし、ICT 機器を利用して視覚的な理解を促し、全体で共有する場や話し合い活動の場面を多く設定し、生徒の実態に応じて授業展開、指導内容を工夫する必要がある。

社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育てる指導の工夫

社会　齋藤博幸

１　実践の概要

社会的事象を多面的・多角的に考察する力をつける手立てとして、同じ考えをもつ班との意見交流で理由根拠を明確化した上で異なる考えを持つ班と討論することで、自分の考えを多面的・多角的に考察し、まとめることができると考えた。

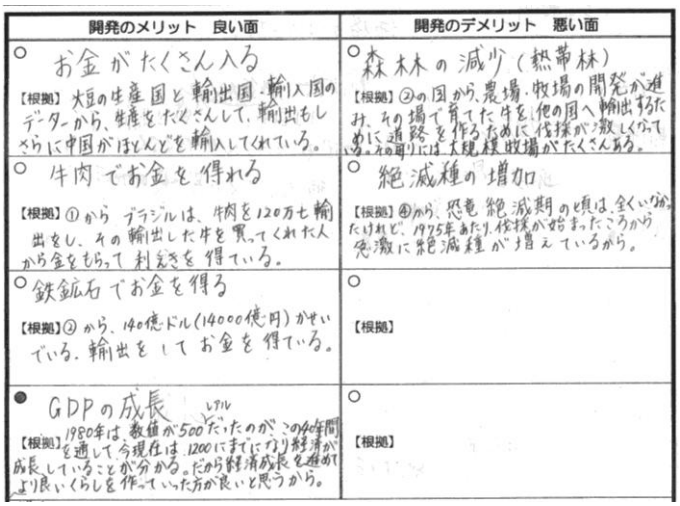
本年度の研究授業では、同じ考えをもつ班で話し合う機会を多く設けた。さらに、全体での話し合いを重ねることで、得た情報を基に自分の考えを再検討し、社会的事象を多面的・多角的に考察できると考えた。

２　授業実践と成果

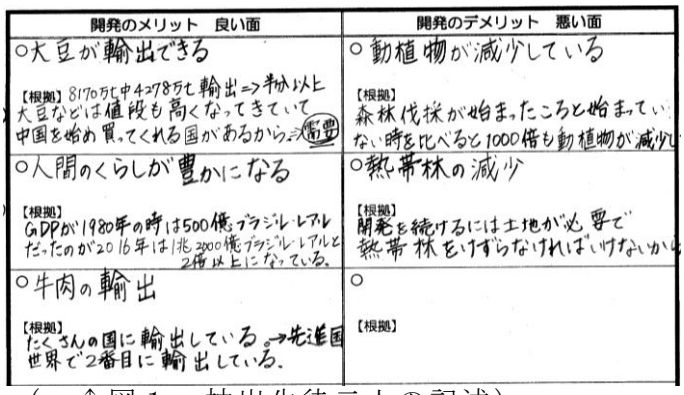
実践１では、熱帯林の開発に関連する資料の読み取りを実施した。資料に関しては生徒が使っている教科書（帝国書院）、資料集（新学社）だけでなく、教師が他の教科書（東京書籍）や資料集（帝国書院）、インターネット（国立環境研究所）から使える資料を精選した。

読み取りは、はじめに全体で見るポイント（注目すべき点）を確認した。そのうえで、個人で読み取れたことを記述させた。どこを見てよいか分からない生徒もいたので、難しい内容についてはペアやグループでの読み取りも実施した。

実践２では、全ての資料の読み取りを完了したところで、開発のメリットとデメリットをまとめさせた。ほとんどの生徒が読み取った資料を基にメリットとデメリットについてまとめることができていた。抽出生徒の記述（図１）では、どちらの生徒も、ブラジルの輸出額の増加や GDP の成長が熱帯林の開発と平行していることに気づき、具体的な数値なども書き込んである記述がみられる。



開発のメリット　良い面	開発のデメリット　悪い面
○ お金がたくさん入る 【根拠】大豆の生産国と輸出国、輸入国のデーターから、生産をたくさんして、輸出もしさらに中国がほとんどを輸入してくれている。	○ 森林の減少（熱帯林） 【根拠】②の国から、農場、牧場の開発が進み、その場で育てた牛を他の国へ輸出するために道路を作るために伐採が激しくなっている。その周りには大規模牧場がたくさんある。
○ 牛肉でお金を得れる 【根拠】①から ブラジルは、牛肉を120万t輸出をし、その輸出した牛を買ってくれた人から金をもらって利益を得ている。	○ 絶滅種の増加 【根拠】④から、恐竜絶滅期の頃は、全くいなかったけれど、1975年あたり、伐採が始まったころから急激に絶滅種が増えているから。
○ 鉄鉱石でお金を得る 【根拠】②から、140億ドル（14000億円）かせいでいる。輸出をしてお金を得ている。	○ 【根拠】
● GDPの成長 【根拠】1980年は数値が500レアルだったのがこの40年間を通して今現在は1200にまでになり経済が成長していることが分かる。だから経済成長を進めてより良いくらしを作っていた方が良いと思うから。	○ 【根拠】



開発のメリット　良い面	開発のデメリット　悪い面
○大豆が輸出できる 【根拠】8170万t中4278万t輸出=>半分以上 大豆などは値段も高くなってきていて中国を始め買ってくれる国があるから。→高い	○動植物が減少している 【根拠】 森林伐採が始まったころと始まっていない時を比べると1000倍も動植物が減少し
○人間のくらしが豊かになる 【根拠】 GDPが1980年の時は500億ブラジル・レアルだったのが2016年は1兆2000億ブラジル・レアルと2倍以上になっている。	○熱帯林の減少 【根拠】 開発を続けるには土地が必要で熱帯林をけずらなければいけないから
○牛肉の輸出 【根拠】 たくさんの国に輸出している。→先進国 世界で2番目に輸出している。	○ 【根拠】

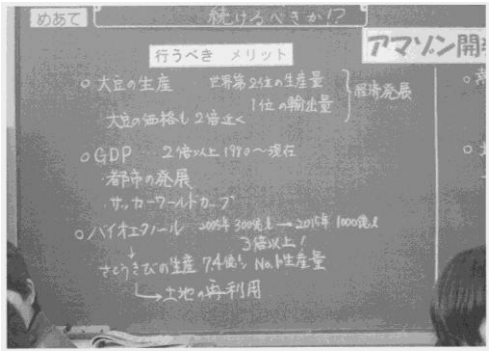
（←↑図１　抽出生徒二人の記述）

実践３では、ブラジルは今後も開発をつづけるべきなのか？」と投げかけ、ブラジルの熱帯林の開発について「賛成」か「反対」のどちらかの立場につかせ、話し合いの場面を設定した。その際生徒達には、なぜ、その立場を選んだのかを理由を必ず言えるようにした。そして、同じ立場の生徒同士で班を編成し意見交流（図２）を実施した。そこで自分にはない考えや見解を付け加えるなど、それぞれの立場での根拠を得られ、自信を持たせることができた。

（↓図２　同じ立場の生徒同士による話し合い活動）

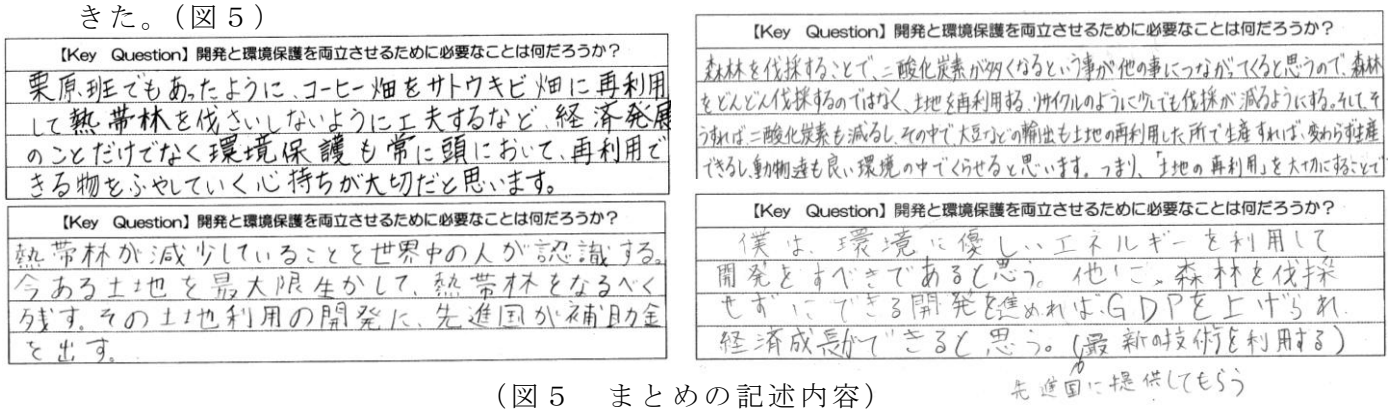
そして、全体で意見発表（図３）を実施した。それぞれの立場で「なぜ反対なのか？賛成なのか？」資料から読み取ったことを基に意見・根拠を述べることができていた。教師は、双方の意見を黒板にまとめる（図４）などコーディネートに徹し、生徒同士で意見を交わすことを主とした授業展開を実施した。

（図３　全体での意見発表の様子）



（図４　生徒の意見をまとめた板書）

最後に教師が「開発と環境保全を両立させるために必要なことは何だろうか？」と投げかけ、今までの話し合いで出た事を参考にしながら、自分の考えをまとめることができた。（図５）


【Key Question】開発と環境保護を両立させるために必要なことは何だろうか？
栗原班でもあったように、コーヒー畑をサトウキビ畑に再利用して熱帯林を伐さいしないように工夫するなど、経済発展のことだけでなく環境保護も常に頭において、再利用できる物をふやしていく心持ちが大切だと思います。

【Key Question】開発と環境保護を両立させるために必要なことは何だろうか？
森林を伐採することで、二酸化炭素が多くなるという事が他の事につながってくると思うので、森林をどんどん伐採するのではなく、土地を再利用する。リサイクルのように少しでも伐採が減るようにする。そしてそうすれば二酸化炭素も減るし、その中で大豆などの輸出も土地の再利用した所で生産すれば、変わらず生産できるし、動物達も良い環境の中でくらせると思います。つまり、「土地の再利用」を大切にすることで

【Key Question】開発と環境保護を両立させるために必要なことは何だろうか？
熱帯林が減少していることを世界中の人が認識する。今ある土地を最大限生かして、熱帯林をなるべく残す。その土地利用の開発に、先進国が補助金を出す。

【Key Question】開発と環境保護を両立させるために必要なことは何だろうか？
僕は、環境に優しいエネルギーを利用して開発をすべきであると思う。他に、森林を伐採せずにできる開発を進めればGDPを上げられ経済成長ができると思う。（最新の技術を利用する）
先進国に提供してもらう

（図５　まとめの記述内容）

実践の一番の成果は、普段、自分の意見をまとめることができない生徒が、自分の意見をまとめることができたこと（図５）。同じ立場の生徒同士で話し合い活動（図２）をすることで、自分に足りないものを補ったり、加えたりすることが自分の意見をまとめることに役立ったのではと考えられる。また、自分の考えも資料の読み取ったことを根拠にすることができたのも、考えをまとめられた一つの要因と考えられる。そして、熱帯林の開発は地球温暖化の原因だから開発はやめるべきという一面的・一角的な考察ではなく、ブラジルの立場に立った多角的な考え方、さまざまな視点（政治、経済、環境など）からみる多角的な考え方がもてたことも成果だといえる。

３　課題と今後に向けて

課題は、本来、本単元の「世界の諸地域　南アメリカ州」は５時間構成であるが、７時間構成で実施したことである。多面的・多角的なみかた、考え方を持たせるには様々な資料の読み取りが必要不可欠であり、その分、どうしても時間を増やさなければ補えないからである。単元の時間編成、カリキュラムのスリム化をどう図るかが課題であると感じた。

二つ目は、資料の精選が難しく、準備に時間がかかる点である。今回、準備した資料も生徒が持っている教科書・資料集では足りず、他の教材から用意した。また、どの資料を使えば、話し合い活動が深まるかを考えることも大変であった。

今回の授業を通して、資料の読み取りと話し合い活動で自分の考えをまとめることから思考力・判断力・表現力の向上を図ることができた。毎回、資料の読み取りや話し合い活動を取り入れる事は難しいが、定期的にこれらの活動を取り入れ、生徒の苦手な観点の向上に努めていきたい。

【判断観点シート】をもとに「協働的な学び」を通してねらいに迫る授業

社会　落合　清貴

１　実践の概要

裁判員制度の意義や課題について理解を深める場面において、模擬裁判を行い、体験的な学習を通してねらいに迫ろうと考えた。特に判決について話し合う協働的な学びの中で、多面的・多角的な意見があることの意義を感じさせるとともに、まとめることの難しさも感じ取ることができるように話し合い活動を設定した。

本時の学習の中心となる意見をまとめる場面では、【判断観点シート】を活用し、自他の考えをより公正に、客観的に捉えられるようにした。明確な正解がある訳ではない裁判の判決を考える中で、どんな「見方・考え方」を働かせて判断を下していくことが重要になるかを体験的に学ばせることで、深い学びにつながると考えた。

２　授業実践と成果

①　模擬裁判を行い、事件についての判決を考える。（個人）

②　【判断観点シート】を活用し、事件についての、よりよい判決を話し合う。（グループ→全体）

③　模擬裁判を通して国民が裁判に参加することの意義や課題について考える。

判断観点シート（全体偏）

☆判断する観点　その１　判決や判決理由は公正なものか？（偏った判決になっていないか？）

その２　判決や判決理由に客観性はあるか？（事実に即しているか？）

※5 点満点

班名	その１　公正さ	その２　客観性	合　計　点
１班	５　４　３　２　１	５　４　３　２　１	
６班	５　４　３　２　１	５　４　３　２　１	

判決について全体で意見交流

・実際に模擬裁判を行うことで、国民が裁判に参加することの意義や課題について、より実感をもって捉えることができた。

・判決について意見をまとめる場面で、【判断観点シート】を活用したことで、自他の意見を、どのような「見方・考え方」を働かせながらまとめていけばよいかを示すことができた。

・終末に弁護士の意見を知らせることで、自分たちの出した判断のよさや課題について理解を深めることができた。

・体験的な学習を設定したことで、どの生徒も意欲的に活動することができた。

３　課題と今後に向けて

【判断観点シート】を活用し、意見についての公正さや客観性を考えさせようとしたが、似たような意見の場合、どのように優劣をつけたらよいのか戸惑う様子が見られた。司法判断という難しく、正解がある訳ではない事象について、発達段階を考慮しながらも、より効果的な「見方・考え方」を働かせながら議論できる【判断の観点】や、話し合いの在り方を再考していく必要がある。

協同的かつ言語活動が充実する学び合いを取り入れ、課題追求する授業

理科　植原

1　実践の概要

実験の考察を発表する際、個人の考察から協同的に話し合い、班での意見をホワイトボードにまとめさせ、発表することを前提とする。発表の際に、発表して終わりでなく、その内容について疑問点や別の視点での考え方、発表の態度など、気付いたことを質問、評価し合うことで、質疑応答のやりとりの中で言語活動を理科の視点から充実できるのではと考えた。

本年度は、実験の考察において、個人の考察から班の考察をまとめさせることにより、言語活動が充実する。また、課題追求をしていく中で、重要用語についても、生徒の言葉で説明してまとめるため、理解がしやすくなるのではと考えた。

2　授業実践と成果

①実験結果から考察を各個人で行う。

②各個人の考察を班で発表し合い、班としての考察をまとめる。このとき、図を用いてよりわかりやすく発表できるようにする。

③クラスで発表を行い、その内容について質疑応答を行い、考察内容を深める。また、質問がなければ、発表内容や態度について評価する。

・発表を前提としているので、聞く人に伝わる内容にするために、図や言葉の表現を工夫することができた。

・赤いマーカーを用いて、自分たちが重要とする単語や内容に自主的に下線を引いたりし、わかりやすい内容を心掛けていた。

・質問や評価を行うため、発表内容をよく聞く姿勢ができている生徒が多かった。

・発表されたホワイトボードを黒板に掲示し、各班の意見を比較させ、どの内容が考察内容として適切であるかを判断しようとしていた。

・その後のまとめを行う際に、発表された内容をもとにまとめを行い、教科書的な表現でなく生徒目線の言葉であるため、理解しやすさが向上していた様子が見られた。

3　課題と今後に向けて

実験が失敗してしまった場合に、発表する内容がうまくいかなったという内容になりがちであるので、うまくいかなかった原因を追究させる指導も入れる必要がある。また、生徒の考える表現が科学的になりにくく、補足して修正する場面が幾度となくあった。質問内容が、日常的によく発言する生徒ばかりになってしまったり、評価が画一的になりがちであった。

生徒が行う考察については、最終的にすべて自分の言葉でできることを目指し、考察するための表現について「〇〇となったことから、〇〇になると考えられる。」など、枠を決めて、その枠を埋めながら考察していく型を指定し、より科学的な考察となるように改善を行っていきたい。

夢に向かってかがやく生徒を育てる【つなぎ教材】の作成

３年理科　西井　寛

１　実践の概要

小中共通のアンケート調査結果から、高学年になるに従って理科が、「きらい」「生活に役立っていない」「きまりを見つけるのが嫌い」「自分で調べていない」「発表したくない」という傾向が強く、これに歯止めをかけることを目的に様々な研究実践を行ってきた。

特に抽象的な概念が必要な「粒子」と「エネルギー」に力を入れ、系統表を作成して、中学校から指導する分子モデルを小学校高学年から「粒」として繰り返し何度も、意図的、計画的に教えてきた。「エネルギー」については、電気、運動について、具体的に分かりやすい教材を整備し、「つなぎ教材」の開発を行ってきた。

こうした実践をまとめるとともに、今後の課題について報告する。

２　実践の経過

(1) 理科好きを育てる

毎時間実験できるようにするとともに、魅力ある教材を整備・開発した。

(2) 生活に役立つことを実感させる

授業の最後に「感想カード」を書かせ、生活に関連させて書いた感想を高く評価し、「振り返り活動」の充実を図った。

(3) きまりを導き出せるようにする

問題－予想－実験・観察－結果－考察の過程で小学校から中学校まで一貫して指導できた。考察を導き出しやすいように問題文を提示してきた。

(4) 調べる力を育てる

授業ごとの復習を家庭でできるようにプリント集を作成した。教科書を見て、復習する習慣を付けさせた。インターネットや資料集を見て調べる学習を行った。

(5) 発表できるようにする

自分の考えに自信がもてるように、班活動を充実させたり、机間巡視を行ったりした。友達の意見を取り入れられるように共感的な人間関係づくりを行った。

３　今年度の実践

(1)　９年間のつながりを意識した理科指導により、目標に向かって頑張る生徒の育成

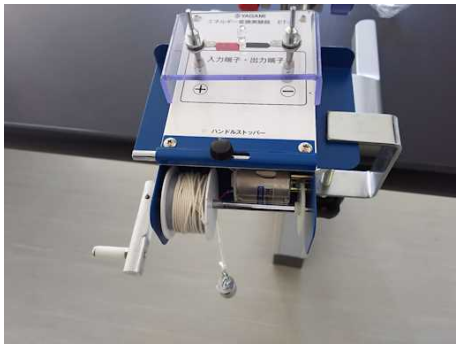
小黒板を利用して、自分の考えを班の中で話し合い、班としての意見を考える時間を設ける

酸性のしみがどちらの極に移動するかを予想･考察する場面で、意見を出し合って、酸性の正体が水素イオンであることを推論した。

系統表をもとに、粒子概念を小学校から段階的に育てる

粒子モデルについて、プリント（つなぎ教材）を用いて継続して指導した結果、ほとんどの生徒が塩酸や水酸化ナトリウムの電離式などイオン式を書けるようになった。

分かりやすい教材作りをして、エネルギー概念を育てる



３学年のエネルギー領域では、電力（W）＝仕事量（W）、電力量（J）＝仕事（J）の関係が分かりにくい。仕事（位置エネルギー）が電気エネルギーに変換されることを理解させるために右のエネルギー変換装置を用いた。

２５ｇのおもりを１ｍ落下させる仕事は０．２５Jなので、ブザー（０．０１W）、ＬＥＤ（０．０２W）、モータープロペラ（０．０５W）、豆電球（０．９W）をそれぞれ可動させるために、おもりが何個必要かを予想させることができた。（２年「電気」からのつなぎ教材。ここでは、空気抵抗がある自由落下では、重さに関係なく、１ｍを落下する時間がおよそ１秒であることによって求めている。）

(2) 振り返り活動を充実させた学力向上

学習した内容を４択クイズで振り返り、定着を図る

定着させたい内容を４択クイズにして、振り返りの時間にコンピュータで提示し、解答させることにより、学習内容をその時間に定着させるとともに、復習させる機会を増やした。

小学校６年生から中学校３年まで、既習事項を振り返ったり、比や小数、分数の計算問題を解いたりする問題集を作成し、授業を復習する習慣をつける

計算問題に苦手意識をもつ生徒が多いので、様々な問題を解きながら自力解決できるようにした。また、高校へのつなぎ教材として、全国の都道府県入試問題を単元ごとに整理し、授業中の振り返りや宿題で復習できるようにした。

理科室の前でも振り返る

４　成果

①生徒は、予想と考察の場面において、自分の考えを班の中で話し合えるようになった。単元が進み内容が難しくなるにつれて、発言する人が限られてしまうが、教え合いの場面は増えた。

②系統表をもとにして、つなぎ教材を作成したことにより、生徒は粒子やエネルギーの抽象概念を形成できるようになり、作図やイオン式を書けるようになった。

③小学校６年から３年まで、既習事項を振り返ったり、計算問題を繰り返し解いたりする問題集（つなぎ教材）を作成できた。

④高校へのつなぎ教材として、全国の都道府県入試問題を単元ごとに整理し、振り返った結果、市内では上位の成績を得られるようになった。

５　課題と今後に向けて

理科の実験を楽しみする生徒が多く、理科学習は本質的には好きであり、実験が多くても学力を維持できる体制はできた。しかし、高学年になり学習内容が難しくなるにつれて、理科嫌いが多くなる傾向は変わらない。

実力テストの偏差値は４８と、平均より低い。学習が難しくなっても、覚えるだけなら理科学習に対する抵抗は少ないが、計算問題となるとつまずいてしまう。その原因となっているのは、比や小数、分数で、小学校高学年の算数である。今後の課題として、小学校段階から計画的な指導を考えていく必要がある。

言語使用場面を設定して表現力を伸ばす指導

英語　澤田　拓朗

1.　実践の概要

　助動詞は動詞と組み合わさることで、動詞だけでは表現できない話し手の気持ちなどを表現する働きをする。**新出言語材料を用いて自分の伝えたいことを相手に伝える場面において、班でクイズ活動を行う際、自分自身で場面を設定させることで、自分の伝えたいことを表現する力を伸ばし、新出言語材料の意味や用法を正しく理解させていきたいと考えた。**

　本年度の研究授業では３ヒントクイズを行った。設定された場面において新出言語材料である助動詞 can を用いた説明文を書き、自分の伝えたいことをより正確に表現でき、また班活動で他者の発表を聞いて、新出言語材料の意味と用法を正しく理解することができると考えた。

2.　授業実践と成果

①　教師のクイズを参考に「自分がなりきる人物・動物」を決め、場面を設定する。

②　３ヒントクイズになるようにワークシートに自分が設定した場面の説明文を３文書く。

③　班でクイズを出し合い、他の人の発表の良さを伝え合う。

・伝えたいことをより正確に表現しようという意識を持ち、説明文を書くことができた。

・同じ班の生徒の発表を聞いて主体的にクイズ活動に参加できた。

・新出言語材料だけではなく、既習表現も用いて説明文を書くことができた。

・新出言語材料の用法について、同じ班の生徒の発表を聞いて間違った用法をしていた場合に指摘し合うことができた。

3.　課題と今後に向けて

　班活動では多くの生徒がクイズ活動を通して自分の伝えたいことを主体的に表現し伝え合うことができたが、自分の伝えたいことを十分に表現できない生徒も見られた。使えそうな表現や例文をもっと多く示したり、教師が会話例を示したり、班で教え合う時間を十分に設けたりしてより学び合う活動を取り入れていくことが課題である。

　また、生徒の意欲関心を高め、「知りたい」などのつぶやきを引き出すための教師の発問の質を高めることが必要である。教師の効果的な英語使用をより多く取り入れ、教師と生徒、生徒同士の学び合いの機会を大切にした授業改善を行っていきたい。

課題に向けてお互いに助け合い、学び合う授業

２年英語　山川　真実

１　実践の概要

英語にとって、ペアやグループ、クラス全体とのコミュニケーション活動は非常に密接な関係にある。本研究では、小グループによる対話活動（イングリッシュサロン）や ALT のためのガイドブック作成に取り組ませることで、英語や外国の文化を通して人と関わる楽しさについて気付き、お互いに学び合うことができる授業を実践する。

「日本のことをよく知らないので、長期休みに旅行したいが、おすすめの国について調べてほしい」という要望を聞き、おすすめの国についてのガイドブック作成に取り組ませた。

生徒から調べたい国について 10 ヵ国程度を出してもらい、各国ごとのグループで取り組ませることで、英語に苦手意識をもった生徒もグループ内で助け合い、楽しくガイドブックを作成できると考えた。

２　授業実践と成果

①授業の導入でおこなったイングリッシュサロンでは、３～４人のグループになり一人の人に質問を交互にしていく対話活動を行った。１分間ごとに一人が立ち、座っている生徒に質問をされる。あらかじめどんな表現が使えるかを全体で共有し、質疑応答をさせたことや、お互いに助け合いながら活動ができていたことでやりとりが継続できたグループが多かった。

②調べる国を 10 個程度に絞り、その中から１ヵ国選ばせたことで、生徒同士で助け合い、学び合うことができると考えた。また、パソコン室での調べ学習から班ごとの活動になり、生徒は使いたい写真を印刷したり、国についての情報を調べたりしていた。英語が苦手な生徒も、２～３人のグループで作成に取り組むことで生徒は楽しく、国についての情報を交わしながらガイドブックの作成に取り組んでいた。

イングリッシュサロンの様子

完成したガイドブック

３　課題と今後に向けて

導入のイングリッシュサロンでは、一人の人が立って質問のやりとりをしたが、生徒たちが実際のコミュニケーションのように、全員が座るなどして、同じ目線でやりとりをするほうが効果的であったように感じた。ガイドブックの作成にはほとんどの生徒が意欲的に取り組んでいたが、中には１時間の国調べが十分にできず情報が少ない生徒も数名いた。家庭で調べてきた生徒もいたが、本や本物のガイドブックなどを参考として渡し、完成度の高いものにさせる必要があったことが課題である。

今後も引き続き、生徒たちがお互いに助け合い、力を高められるような授業作りを意識し、コミュニケーション能力を高め、英語が楽しいと思えるよう授業改善を行っていきたい。

単元を通した Evaluation Card(振り返りカード) を活用して

考えを深める授業

英語　山田 章恵

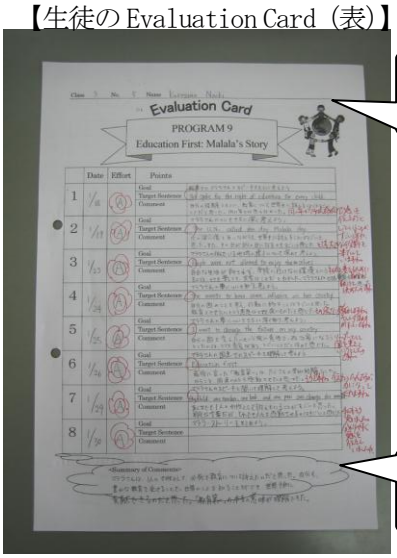
１　実践の概要

新しい単元に入るとき，単元を通した目標や学習計画を立て見通しを持って学習に取り組めるようにしたい。また，時間ごとに何を学習してどんなことを考えたのかを振り返り，振り返ったことを次時の学習に生かし，単元を通して学習したことや考えたことをまとめたり深めたりしていくことが大切である。義務教育をしめくくる中学３年生には，先を見通す力を付け，自分から進んで学習に取り組む姿勢を身に付け，高校での学習につなげさせたいと考える。

２　授業実践と成果

単元ごとの学習計画を配布し，生徒はそれをもとに予習→授業→復習の流れで学習を進める。授業では，Evaluation Card(振り返りカード)を使って，時間ごとに，Goal(学習のめあて)，Target(基本文または心に響く文)，Comment(分かったことや考えたこと)，Effort(取組の評価)を記録する。記録後，ペアやグループで，その時間の学習を振り返って共有する。カードは毎時間回収し，教員も確認し，次時の指導に生かす。単元の終わりには，単元を通して学習したことや考えたことをまとめ，ペアやグループ，さらにクラスで共有する。

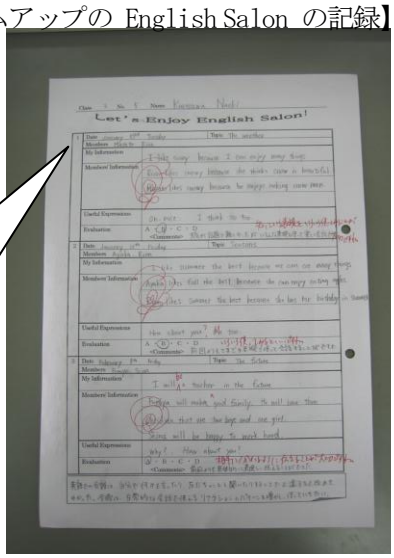
【生徒の Evaluation Card (表)】　　【(裏)ウォームアップの English Salon の記録】



１単元ごとに，学習したことや考えたことを蓄積する。

毎時間のウォームアップに，ペアやグループで英語によるコミュニケーション(English Salon)を行い，伝え合ったことや使えた表現を記録していく。

単元の終わりに，単元を通したまとめをする。



学習計画をもとに，Evaluation Card に学習したことや考えたことを記録することで，生徒は見通しを持って学習を進めることができていた。前時の感想や疑問を踏まえて次時の学習に取り組むことで，自分から進んで学習に取り組む意欲が見られた。それらを仲間と共有することで，同じ考えや違う考えがあることを知って考えを深めることにつながった。教員が毎時間の個々の生徒の学習の状況を把握することで，次時に的確な指導をすることができた。

３　課題と今後に向けて

各単元の目標を十分に達成するために有効な手立てであったが，授業の最後に時間をとることが難しいこともあり，自分で振り返るだけで仲間と共有することができないこともあった。授業の展開を工夫し，振り返ったり共有したりするために十分な時間を確保するように心がけたい。

また，生徒によって，記録することや共有できたことに差があり，単元の中で，また１年を通して，深まりが不十分な生徒も見られた。個々の生徒が考えをより深めていけるように，手立てを考えていきたい。

さらに，授業の振り返りに関しても中学校３年間がつながっていくように，各学年の担当で考えを共有して進めていきたい。

班での学び合いを通して自己の技能の課題を見つける授業

保健体育　高岩　友美

１　実践の概要

ティーバッティングの練習をする場面において、グループで互いのフォームを見合い、助言し合うことで、バット操作の行い方のポイントに気付き、チームメイトの課題を見つけたり個人の技能を上達させたりして強い打球を打つことができるようにしたいと考えた。

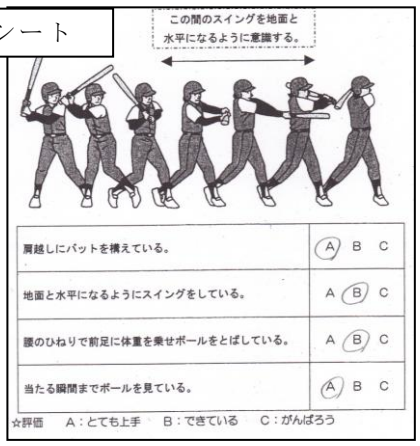
本年度の研究授業では、バッティングチェックシートを用いた。グループ練習をする際にチェック項目を示した用紙を使うことで、ポイントをしぼって見ることができ、そのポイントを意識して自身の技能の向上にも生かし、ねらいに迫っていくことができると考えた。

班で学び合い活動をすることで、視覚的に運動を捉え、運動の行い方のポイントに気付きチームメイトや自己の課題を見つけることができるであろう。

２授業実践と成果

①ティーバッティング練習のときに､スイングフォームを見合いシートにチェックをする。
②チェックシートをもとにバッターにアドバイスをする。
③個人の学習カードに振り返りを記入する。

チェックシート



個人のワークシート

・チェックシートを使用することで、構えの位置、スイングの通り道、腰の捻り、ボールがミートする瞬間の４つのポイントに着目して見合うことができていた。
・チェックシートに見本となるスイングの図を載せることで、見比べながらチェックすることできた。
・バッティングが終わるとシートをもとにしてアドバイスする時間を設けたので、評価したものを見ながら、アドバイスすることができた。
・チームメイトにアドバイスをすることで、本人のバッティングへの意識も高まり、素振り練習をするときから、水平にバットを振ることへの意識が強くなっていった。
・振り返りを各自がしっかりと行い、次時の課題を持つことができた。

３課題と今後に向けて

イラストのバッティングフォームでは、良い動きがイメージできない生徒もいて、相手の動きが正しいのか分からなかった。タブレットで撮影をしておいて、いつでも正しいフォームを確認ができるようにしておきたい。

また、自己の課題に気付いた後、それを解決するための練習方法を選ぶことができる力を育てていくことが今後の課題である。

【学習カード】をもとに「協働的な学び」を通して体力向上を図る授業

体育　赤松　賢

１　実践の概要

体力向上や技能向上を図るために体育の授業を行うが、実技教科の特性としてどうしても、生徒主導の授業より教師主導の授業になってしまう。そこで、前もって学習カードに練習メニューを例示し、その中から自分たちに必要なトレーニングを話したって選択したり、発展的に練習を考え出したりすることで、意欲向上につながり、結果体力の向上につながると考えた。

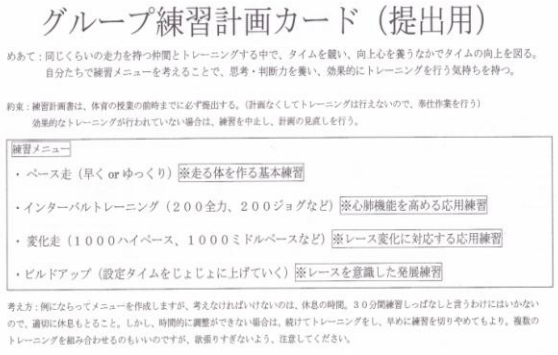
２授業実践と成果

①学習カードに練習メニューを例示する。
②授業の最初に練習メニューを確認させ、グループ練習をする。
③残り１０分を次時の練習メニューを考える時間を与える。

練習計画書（提出用）

メンバー　◎髙坂　○須田　・石川・白田・温井・上原・小林・松本けいた

ねらいの確認＆体操	1分45秒の ペース走 5周	持久	エンドレスリレー 200m 8人3チームに分ける	持久	計画作成＆まとめ
ねらいの確認＆体操	1分55秒～50秒 →45→40 4周	持久	流しエ本	持久	筋肉トレーニング 計画作成＆まとめ
ねらいの確認＆体操	山メニュー 1200m, 1000m, 800m, 600m, 200m 間はジョグ1周ずつ				計画作成＆まとめ
ねらいの確認＆体操					計画作成＆まとめ
ねらいの確認＆体操					計画作成＆まとめ



グループ練習計画カード（提出用）

めあて：同じくらいの走力を持つ仲間とトレーニングする中で、タイムを競い、向上心を養うなかでタイムの向上を図る。
自分たちで練習メニューを考えることで、思考・判断力を養い、効果的にトレーニングを行う気持ちを持つ。

約束：練習計画書は、体育の授業の前時までに必ず提出する。（計画なくしてトレーニングは行えないので、事仕作業を行う）
効果的なトレーニングが行われていない場合は、練習を中止し、計画の見直しを行う。

練習メニュー

・ペース走（早く or ゆっくり）※走る体を作る基本練習
・インターバルトレーニング（２００全力、２００ジョグなど）※心肺機能を高める応用練習
・変化走（１０００ハイペース、１０００ミドルペースなど）※レース変化に対応する応用練習
・ビルドアップ（設定タイムをじょじょに上げていく）※レースを意識した発展練習

考え方：例にならってメニューを作成しますが、考えなければいけないのは、休息の時間。３０分間練習しっぱなしと言うわけにはいかないので、適切に休息もとること。しかし、時間的に調整ができない場合は、続けてトレーニングをし、早めに練習を切りやめてもより。複数のトレーニングを組み合わせるのもいいのですが、欲張りすぎないよう、注意してください。

・等質のグループを作ることで、力が均衡し練習メニューが組みやすかった。
・自分たちで考えたメニューなので、意欲的に取り組む姿が見られた。特に長距離の授業は苦手意識の高い生徒が多いが、そのような生徒も積極的に練習する姿が見られた。
・時間を３０分と限定することで、無理なく計画が立てられた。
・授業の始めは、練習の例示をやることが精一杯であったが、後半には自分たちで新たなメニューを考えたり、組み合わせを工夫したり、体感トレーニングを行う班等も出てきて、ねらいに近づくことができた。

３課題と今後に向けて

班によっては強いリーダーシップのもとであったり、消極的な生徒であったりすると協働的にならなかった班もあった。また、等質にした班であっても差があり、メニューがこなせない生徒も見られた。

今後は、巡視をしながらアドバイスを行い、多様な意見が出せる雰囲気を持てるようにしたい。また、班を細分化することによって差を縮め、班で同じメニューができるようにしていきたい。

ものづくりに関する思考力を高める工夫

技術　石田　卓哉

1　実践の概要

オリジナルの木製品を製作する題材の中で、個人で考えたアイディアスケッチから使用目的・使用条件や機能を考えて構造を再検討する際、簡易的に製作した試作品をもとに、グループで適切な部品の大きさや組み立て方法を検討する活動を取り入れたいと考えた。

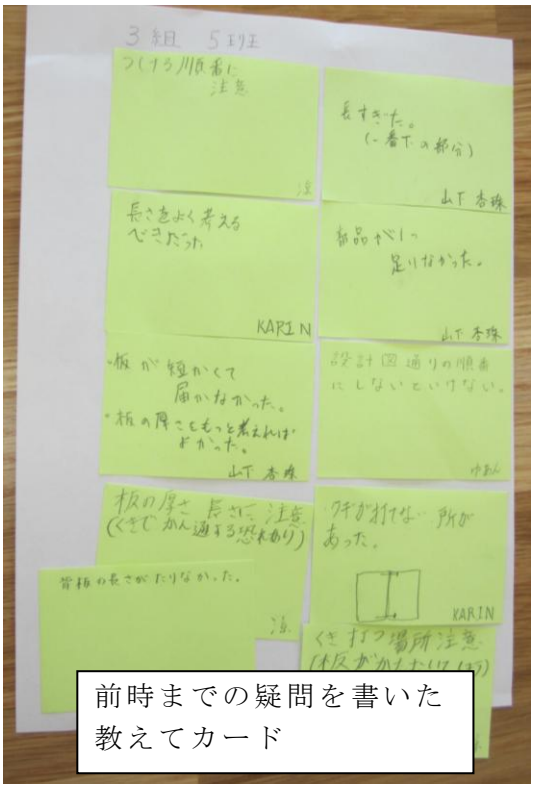
個人で考えたアイディアスケッチから部品図、木取り図を作図し、その上でスチレンボードを使って試作品を製作することで生徒自身が作品の構想をより具体的に捉えることができると考えた。また、試作品の構想をグループで検討する活動を通して、個人では解決できない課題を改善できたり、多様なアイディアを参考に自身の作品を修正することができ、ものづくりに関する思考力を高められると考えた。

2　授業実践と成果

①前時までに製作した試作品と教えてカードをもとに、いいねカード、アドバイスカードを使ってグループで話し合い、製作品を検討する。
②教えてカードとアドバイスカードから設計のポイントをまとめる。
③話し合いをもとに試作品を修正する。

話し合いに用いた試作品

いいねカードとアドバイスカードを見て再検討



前時までの疑問を書いた教えてカード

・製作品の構想を試作品として具体的にすることで子どもたちの話し合い活動がスムーズになり、深い意見交換ができた。
・似ている意見がたくさん出たことでその視点の重要性やみんなが同じ課題を持っているという安心感の中でのびのび活動できていた。
・教えてカード、いいねカードとアドバイスカードとして付箋を用いたことで、共感的な視点からも意見交換をさせ、貼り付けることで相手の作品への意見が形に残り、設計のポイントに自分たちで気がつくことができた。授業中の生徒指導の３機能に有効な手立ての１つだった。

3　課題と今後に向けて

いいねカードに時間を割いたのは生徒指導上必要だったが、話し合いからさらに多様なポイントを出させたかった。また、振り返りの部分の試作品の再検討の時間が少なく、単位授業内で授業内容を理解し、作品に表す生徒が少なかった。

指導内容をさらに明確にし、ICT 機器を利用して生徒に教え込む場面の効率化を図っていくことで、生徒に考えさせる場面に重きを置くことができる。授業後の生徒の姿を良くイメージし、題材を通した流れある授業の中にも単位時間の重みを持たせていきたい。

【話合いの視点】を明確にした協働的な学びを通してねらいに迫る授業

家庭科　古市　由香里

１　実践の概要

郷土料理は地産地消の食事であることを知り、地域の食材を使うことの良さについて話合い視点を提示し、話し合わせることで、思考力が高められ、郷土料理を見直すことができるであろう。

本年度の研究授業では【話合いの視点】を明確にして協同的な学びを行った。

追究場面で、地域の食材を使うことの良さを「生産者」「消費者」「環境」の視点を提示し、話し合わせることで、地域の食材を用いることの良さについて多面的に気付き、地産地消の原点である郷土料理に関心をもち、ねらいに迫っていくことができると考えた。

２　授業実践と成果

① 群馬の農産物について調べてきたことを発表する。

② 地産地消について知り、地域の食材を使うことの良さを【話合いの視点】を示し、話し合う。

③ 郷土料理は地産地消の原点であることを知る。

地域の食材を使うことの良さについて考え、地域の食材を生かした調理を知ろう。

地産地消　＝　郷土料理　③

群馬の農産物と全国順位　①

生産者側
・輸送コスト減

消費者側
・安全安心
・新鮮
・低価格

②

環境面
・輸送エネルギー減

・おやき
・おっきりこみ
・うどん
・やきまんじゅう
・けんちん

・小学校で学習した事や家での調べ学習で群馬の農産物について発表し合ったことで、群馬の農産物に関心を持つことができた。
・地域の食材を使う良さについて地域の実物の食材を提示して「生産者」「消費者」「環境」の視点で班ごとに話し合わせたことで、多様な考えを持たせることができた。
・地産地消の良さから郷土料理について関心を高めることができ、次時の調理実習に意欲を高めることができた。

３課題と今後に向けて

考える視点を与えたことで、多面的に考えを深めることができたが、生徒の経験や知識からの考えになってしまうので、比較させて考えさせるよう地元の物と多く流通している物の２つを提示するとかデータ等の思考を促す資料が必要に思った。家庭科は、生活科学だということを再認識し、科学的に考えるような授業ができるよう、家庭科の授業のあり方、授業改善を行っていきたい。

歌詞カードと学習プリントを使って意見交換しねらいにせまる鑑賞の授業

音楽　田嶋　弘典

１　実践の概要

鑑賞の授業では、「どんなふうに聞こえたか」と「なぜそう聞こえるのか」という雰囲気の感じ取りとその理由となる音楽的な裏付けが重要である。それを鑑賞のポイントとして取り上げ、雰囲気を感じ取りやすいように歌詞カードを使い、整理して記入しやすいよう学習プリントを使用する。そして、個人で記入した後に、友達と意見交換することで、互いに気付かなかった聴き取りを共有することでより的確で、深い鑑賞につなげていくことをねらっている。

２　授業実践と成果

（１）　ねらい　　有名なオペラのアリア７曲の歌詞と音楽的な特徴の関連を感じとって鑑賞する。

（２）　活動の手立て

①　歌詞カード　日本語と原語がそれぞれ掲載されているプリントを用意し、原語での発音と聴きとりと内容の理解を深められるようにする。

②　学習プリント　雰囲気・音楽的な特徴という欄を設け、関連を図りながら鑑賞できるようにする。

③　意見交換　　１曲ごとに時間を取り、雰囲気・音楽の特徴など感じ取ったことを意見交換する。その後、教師のコーディネートにより全体の場で発表し合い、より深い感じ取りを共有できるようにした。

④　生徒の学習プリント（抜粋）

アリア名	オペラ名	曲の雰囲気	音楽の特徴
夜の女王のアリア	魔笛	勇ましい･高ぶる感情・叫び・怒り・魔女	すごく高い　繰り返し強い音　細かいリズム
私のお父さん	ジャンニ・スキッキ	やさしい・せつないおだやか・お願い	なめらかなメロディーライン　つながるフレーズ高い音

（３）成果

生徒たちは、感じている部分が、それぞれ違う。例えば、音楽（声）の持つ雰囲気（イメージ）であったり、アリアの物語の内容であったり、 音楽の要素であったりした。それらを意見交換することで、自分が気付かなかったことを知ることができ、より深く音楽を鑑賞できるようになることが証明された。

３　課題と今後に向けて

課題は、今回のようによ短時間で可能な限り多くの名曲に（今回は２時間で７曲）を鑑賞する場合には、どうしてもじっくり考える時間が制限され、教師と生徒の一問一答のようになりがちで有り、曲によって、深くと簡潔にを計画の段階から設定しておくべきだと感じた。

表現図鑑作成の試行活動を協働で行うことで主題を表現する力をつける

美術　中村順子

【生徒Ａ「静かなピアノ」】

１　実践の概要

１年美術　水彩画「私の小野中物語」は、学校情景の中から心惹かれるものを探し、そこに自分なりの物語を見付け、主題とした。本時は水彩絵の具の様々な技法を活用して表現していく導入の段階である。手引き（つなぎ教材）を使いながら、これまでの表現技法の基礎学習を振り返り、基本的な技能の視点を明確に意識づける目的で『「水名人・色名人・筆名人」に挑戦しながら、みんなで水彩絵の具の表現図鑑をつくる』試行活動を行った。

【水彩の手引き】

２　成果と課題

①水彩絵の具の手引（きつなぎ教材）

既習内容の確認と今後の発展を見通すことで机上の使い方、マイパレットの使い方等水彩の基本的事項の押さえることができた。

②ネーミング「水名人、色名人、筆名人」

活動のめあてを明確に示すことができ、

彩色活動全体を通して生徒に意識づけを図ることができた。

③試行活動（表現図鑑）

小グループで小さな用紙に様々な表現方法を試す。

友達の表現を参考にしたり、気楽に伸び伸びと挑戦できた。

④「学び合い」

試行の途中に友達の作品を見る活動、みんなでつくった図鑑を相互鑑賞する活動により「友達のよさを認め、自分の作品に取り入れる。自分の主題を表現する方法を模索する。」等作品の質に大きな変化が見られた。

【小グループで試行】

【相互鑑賞】

↓【授業後の振り返り生徒Ａ「今日の学び･今後に生かせること」】

3	○みんなでつくる表現図鑑 挑戦 「水名人/色名人/筆名人」	描画材料の特性を理解し表現の幅を広げる力 基本　パレット 試行　水/筆/色を使って	にじみ・ぼかしで、夕日が上しこむようなところが表現できようだなと思いました。そして、混色をつかって、いろんな色で物を書きたいです。 自分の色づくりができるってすば
4	○主題を表す色彩と表現を選び描く	主題を表すため工夫する力 色彩の感情　主調色 自分の色 すべて同じにぬらなくてもいいんですよ 筆のあとや色むらなども工夫してみて	にじみを使って、色をうすくこまたり、混色を使って、暗くしたり、明るくしたりできたので良かったです。そして、これからも明暗のはっきりとした絵を書きたいです。明暗を意識できたね。

３　今後に向けて

○別題材における指導の系統と共通事項を生かした付けたい力を明確にしていく。

○新学習指導要領　改訂の主旨にある社会とのつながりをどのように捉え、授業に落とし込むかを検討していく

【思考ツール】をもとに「協働的な学び」を通してねらいに迫る授業

道徳　篠﨑　巧

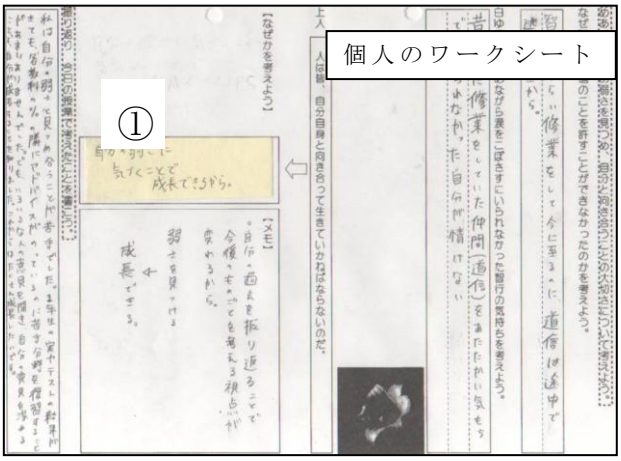
１　実践の概要

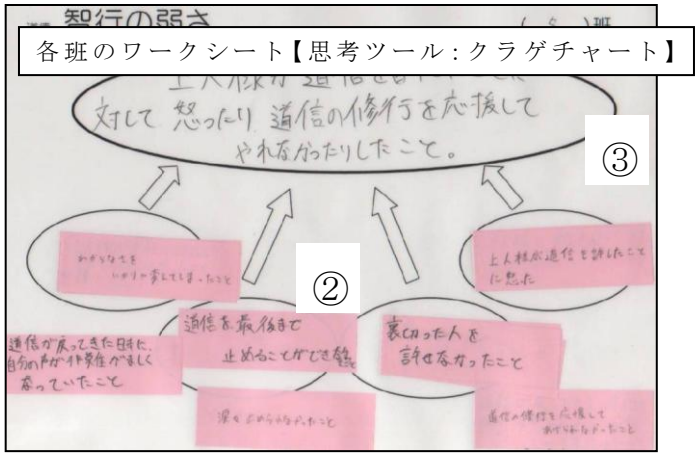
登場人物の心情の変化をもとに自分自身と向き合う場面において、個人で考えたのち班で意見をまとめる活動を行う際、【思考ツール】を活用し、一人ひとりのもっている考えを可視化し、操作化を促すことで、班で意見を交流し、さらに意見を深められるようにしたいと考えた。

本年度の研究授業では【思考ツール：クラゲチャート】を用いた。生徒一人一人が自分の考えを付箋紙に書き、それをクラゲの足の部分に貼り、それぞれの意見をもとにして意見を練り上げる活動を通して、他者の意見を主体的に聞き、他者の意見を理解する中でねらいに迫っていくことができると考えた。

２授業実践と成果

①主発問について個人のワークシートに自分の意見を書く。
②【クラゲチャート】のクラゲの足の部分に自分の意見を貼り、意見を交流する。
③出てきた意見をもとに班の意見をまとめる。





・同じ班の生徒に発表するという目的意識をもち、付箋に意見を書くことができた。
・似ている意見の付箋を重ねたり、似ていない意見の付箋を離したり、それぞれの意見をもとにまとめるという見通しをもち意見交流ができた。
・個人の意見である付箋に書かれた内容をそのまま書いてきた班は９班中１班のみで、８班がそれぞれ個人の意見をもとに班で話し合い､意見を一つにまとめたものを発表した。
・全員の言葉を入れようとするあまりにねらいから離れてしまうと話し合い活動をする意味がなくなってしまうが、主体的に意見を発表したり、意見を聞いたりすることを目的とする場合有効であった。

３課題と今後に向けて

班活動では【思考ツール：クラゲチャート】を活用して、話し合いを活発にすることができたが、全体の中ではそれぞれの班が発表して終わりになってしまい全体で話し合いを深めることができなかった。班からの意見をもとに全体で話し合う展開や仕掛けを考えていくことが課題である。

また､「考え、議論する道徳」の実践のために、１つの道徳的価値について、学級の生徒全員が意見をもち意見を出し合い、ねらいに向かって意見を練り上げていく。そのような授業ができるよう、道徳の授業のあり方、授業改善を行っていきたい。

生徒が自発的・自治的に取り組む学級活動の工夫

学級活動　櫻井　大起

１　実践の概要

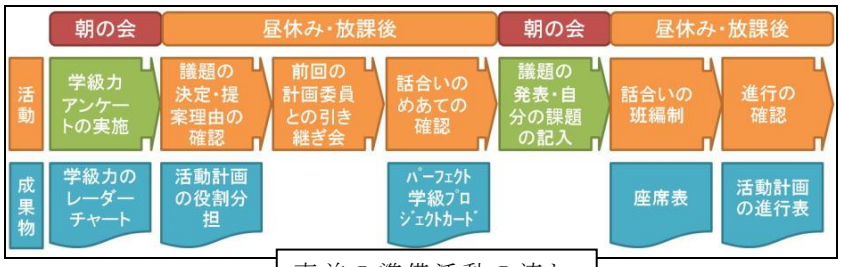
本学年の生徒は、学校行事に一生懸命に取り組み、学習面では、家庭学習をこつこつと頑張るなどのよさを持っている。一方で、一小学校一中学校による連携型小中一貫校という環境であり、友人関係が固定されやすく、新たに人間関係を広げて交流を深めようとすることに消極的な傾向が見られる。また、学年で実施した「学級力アンケート」では、学校生活の課題に対して自分たちで主体的に改善していこうとする意識がやや薄い傾向にあることも分かった。

そこで、学級活動において、計画委員を中心として「パーフェクト学級プロジェクトカード」を活用した話合い活動を行い、生徒が主体となり仲間と交流し合いながら学級の課題やその改善策について考え、実践に移す場を設定していく。これらの活動を積み重ねていくことにより、生徒が課題解決に向けて自発的・自治的に学級活動に取り組むことができるようになると考えた。

２授業実践と成果

【実践】

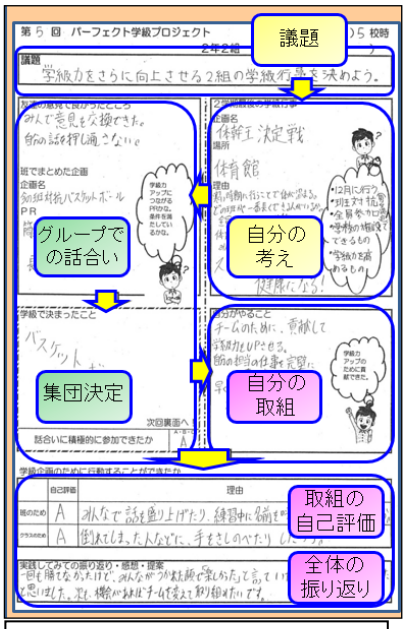
①　事前



事前の準備活動の流れ

②　本時

考えが同じ傾向の生徒同士の班で、友達の意見の良いところを意識しながら話合い、発表内容をまとめる。それぞれの班の発表を踏まえ、めあてにそった意見交流を全体でしながら集団決定（話合いの内容によっては、集団決定した内容から自己決定をする場合もある）していく。



パーフェクト学級プロジェクトカード

③　事後

集団決定（または自己決定）した内容を意識し、行動に移していく。毎日自己評価をつけ、最終日には、全体を通しての振り返りや感想、提案などを記入する。計画委員は全員の「パーフェクト学級プロジェクトカード」から成果の分析、企画・運営面での留意点や改善点をまとめて「引き継ぎ会」に備える。

【成果】

・「パーフェクト学級プロジェクトカード」を活用することで、生徒が「自分の考え」や「見通し」を持って話し合い、主体的な活動につながった。

・計画委員の「引き継ぎ会」や班編制の工夫をすることで、生徒が主体となって企画・ 運営をすることができた。

３課題と今後に向けて

話合いのめあてを常に意識し、焦点を絞った話合い活動ができるよう、生徒の活動を見守りつつ、教師の適切な助言や称賛を交えることが必要である。他の学年、学級でも実践してもらい、学級活動のあり方を考えながら、授業改善を行っていきたい。

必要な合理的配慮を考え、ロールプレイ通して生活の自立につなぐ授業

自立　宮村　あゆみ

1　実践の概要

年間を通して清掃、給食、係活動などの特別活動において、仲間との共生ともに自分の役割を増やせるように指導すれば、生活への意欲が高まり、生徒の自立につながると考え実践を行った。

本年度の研究時授業では「できること何でもチャレンジ！ 10 分間で給食当番のおかず係を成功させよう！」というめあてのもと友達が給食当番を行っている写真から給食配膳の様子をイメージさせ、自分に必要な合理的配慮は何かを考えた。次にロールプレイを通して振り返り修正し、自信を持って給食当番の役割を果たせるようにした。人々と共生していくことと自立していくべきところを明確にし、これからの生徒の自立に役立てるようと考えた。

2　授業実践と成果

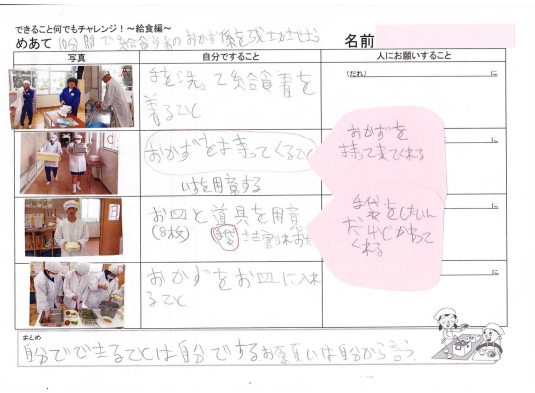
①給食当番の様子の写真を並びかえる。

②「自分がすること」、「人にお願いすること。」の内容を考える。

③人にお願いするときの台詞を吹き出しに書く。

④給食当番のロールプレイをする。

②③



④

・役割を増やすことにより、自分の存在感を高めようと意欲的に授業に臨んでいた。

・黒板掲示用と手元で操作できる写真を用意したことで、動かずスムーズに並べ替えができた。給食の準備の手順を本人が納得してすすめることができた。

・ロールプレイをしたことで自信がつき、実際に給食当番のおかず係をしたいという気持ちが高まった。

・段取りや手順などは就職後の手順にも活かせる実践になった。

3　課題と今後に向けて

お皿を一枚一枚広げずに数えることや配膳が終了したら手袋をはずすなど教師が無意識にできることでも生徒は難しいことを想定して、授業を組み立てる必要があった。何のために〇〇して、何のために〇〇を使うかなど目的と行動を関連付けられるようにするとイメージしやすくなったと思う。

今後も生徒の自立向け、仲間との共生していけるようにコミュニケーション活動を多く取り入れるとともに、意欲的にチャレンジできそうな役割を見定め、自己存在感を高められるような実践をしていきたい。

自身のインタビュー録画の視聴と振り返りを通して聞く力を高める授業

自立活動　須藤　ゆう子

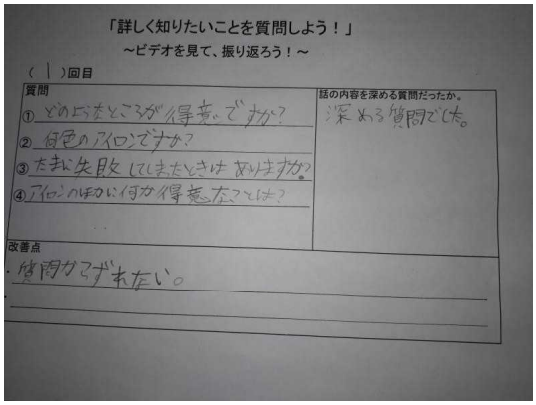
１　実践の概要

生徒はこれまでの様々な学習や生活の場面において、コミュニケーションが上手く図れないことが原因で、適切な行動がとれなかったり、友達関係に問題が生じたりすることがあった。特に、相手の話を聞けない面があったので、相手の話をしっかり聞く力を高めることによって、コミュニケーション力を育てたいと考えた。

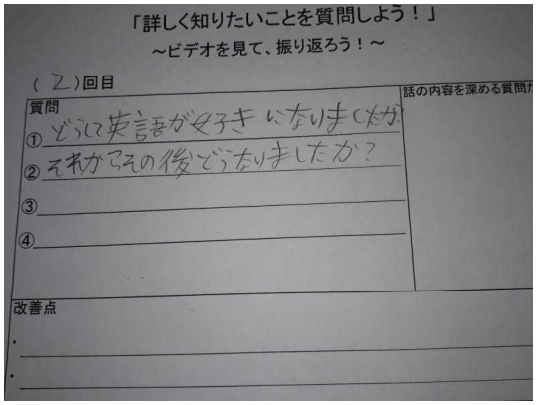
教師へのインタビュー場面を録画し、それを視聴することによって、より良い「聞き方」にするためにどのような点に気をつければ良いかを考え、改善させていけば、「聞くこと」の力を高めることができると考えた。

２　授業実践と成果

①教師の説明を聞きながら理解を深めるための質問の練習をする。
②これまで学習した「聞き方ポイント１～４」を生かしながら、教師にインタビューする。
③インタビューの録画を視聴し、良かった点と改善すべき点をワークシートを用いて振り返る。
④１回目のインタビューの振り返りをもとに２回目のインタビューをする。



③１回目のインタビューの振り返り



④２回目のインタビューの振り返り

・自分の苦手なことに取り組んでいるにも関わらず、意欲的に取り組むことができた。
・あいづちの合間に次の質問を考えるなど、会話のやりとりが教師と対等にできていた。
・以前からできていたことを意識化してできていた。

３ 課題と今後に向けて

インタビュアーとして、質問をしている時に、自分の話をしてしまうことがあった。「話すこと」と「聞くこと」は、表裏一体であるため、どちらかに特化させることが難しい場合は、自然な流れで両方をさせる実践も取り入れていきたい。

自立活動の授業時間だけでなく、日常生活においても本題材で学んだことを生かしてコミュニケーションができるように意識させたい。

また、自立活動の年間計画については、変更が可能なように、柔軟な内容のものを作成できるように留意したい。

ソーシャルスキルトレーニングを通して社会的場面での問題解決方法を考える

自立活動　田代　和也

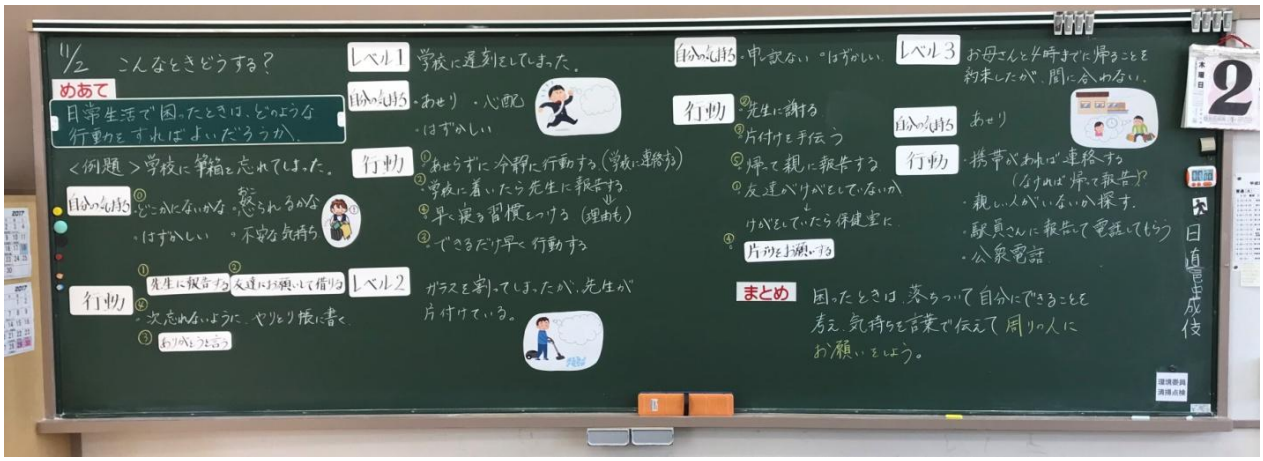
1　実践の概要

社会的場面において起こりうる問題を、生徒の日常事象に置き換えてシミュレーションする際、場面を視覚的に捉えることができるよう画像を提示し、問題と解決方法をワークシートで整理させることによって、状況に応じた思考と判断の能力を高めたいと考えた。

本年度の研究授業ではソーシャルスキルトレーニングとして、提示された場面を想像し行動を考える活動を行った。段階的に問題の難易度を上げていくことで、簡単な問題の解答をもとに難しい問題を考え、ねらいに迫ることができるとともに、生徒にとっての今後の課題を明確にできると考えた。

2　授業実践と成果

①画像と発問を見て状況を判断する。
②自分の気持ちと、すべき行動を考え、ワークシートに記入する。
③自分の考えを発表し、教師と振り返る。



・はじめに例題を教師と考えることで、授業の流れを理解することができた。
・難易度の低い問題は生徒にとって簡単であったが、積極的な発言ができた。難易度を段階的に上げることは、自己肯定感を高めること、発言する意欲を与えることには有効であった。
・取り組む時間を明示することで、教師の説明を聞く時間と、ワークシートを記入する時間を分け、集中して取り組むことができた。

3　課題と今後に向けて

今回の活動では教師が提示した問題を自身で考え、教師とともに振り返るという授業形式であったが、生徒自身が日常生活でどのようなことを問題としているのかを知り、問題を作成することができなかった。事前にアンケートを行うなど準備の工夫が必要である。また、生徒にとっては気持ちと言葉と行動のすべてを同時に考えることが難しかったと考えられる。「感情」と「行動」を分けて考えた後に関連性を捉えさせるだけでなく、相関が視覚的に捉えやすい教材やワークシートを考えていくことが必要である。

ソーシャルスキルトレーニングは教師による説話ではなく、生徒自身が実際的な活動を通して自ら学んでいくものであることを踏まえ、教師からのアプローチは簡潔明瞭で生徒に明確な目的を持たせるようにしていきたい。自立活動を通して、学校生活における人間関係の形成や個人の課題解決をしていくとともに、将来、生徒が社会生活で個性を活かして過ごすことができるよう、「繋ぎ」を意識して授業改善を行っていきたい。